様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｋ０４５０５

研究課題名（和文）1720年代から1820年代フランスにおける市民教育論の形成に関する研究

研究課題名（英文）Discussion on the civic education in France from the 1720s to the 1820s.

研究代表者
越水　雄二（KOSHIMIZU, YUJI）

同志社大学・社会学部・准教授

研究者番号：４０２９３８４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、フランスで1720年代に公刊されたシャルル・ロランの『トレテ・デ・ゼチュード』の内容を分析し、その受容や関連する議論に注目しながら1820年代までの論者の多様な著作も検討して、１世紀にわたる教育思想の展開を〈市民教育論〉の形成を探る観点から考察した。結論として、その間の政体と政教関係の変化に拘わらず、国家を構成する市民の創出へ向けて、キリスト教信仰を否定せずに根底に置き、フランス語による基礎知識の提供と古典人文学による道徳性の涵養を行う学校教育を追求し、女子への普及も視野に入れる思潮が醸成されていたと解釈できる側面を新たに捉えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　日本では、明治期の近代学校制度創設が倣ったフランスの事例から、義務・無償・世俗の学校教育を国民に提供する〈近代公教育〉の理念型が論じられ、その思想的源泉が18世紀後半の啓蒙思想家に辿られてきた。これに対して本研究は、18世紀前半にシャルル・ロランがキリスト教信仰と古典人文学に基づいて公刊した『トレテ・ゼ・エチュード』に着目し、絶対王政から革命とナポレオン帝政を経て王政復古へ至る政体の変遷下に公教育の在り方が模索された過程で、その書が当事者間のイデオロギー的対立とは異なる次元で参照され続けていた史実を解明して、フランス教育史の展開を捉え直す解釈を提示できた。

研究成果の概要（英文）：This study examines the discussion by Charles Rolland in “Traite des Etudes” published in the 1720s and elucidates how it was accepted by diverse readers until the 1820s, as an attempt to consider the development of educational thought over the period. It sheds a new light on the aspects which can be interpreted as indicating that a current of thought seeking school education cultivating morality based on Christian faith and classical humanities without contradiction grew gradually over the period with an eye also to covering women, toward creating citizens and unbound by political transitions.

研究分野：西洋教育史

キーワード：フランス教育史　シャルル・ロラン　『トレテ・デ・ゼチュード』　市民教育　近代公教育　啓蒙思想　古典人文学　キリスト教

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

⑴シャルル・ロランの教育論に関する研究

1720 年代から 1820 年代までのフランス教育思想の展開を〈市民教育論〉の形成という観点から考察しようと筆者が考えた契機は、本研究の前に進めた平成 24～28 年度科学研究費補助金基盤研究（C)「シャルル・ロラン『学校教育論』から捉えるフランス近代学校文化の形成」により、1818 年のアカデミー・フランセーズ懸賞論文入選作が、ロラン Charles Rollin（1661-1741）は「善き市民」le bon citoyen を育てる「教育の学問」la science de l'éducation に取り組んだ、と讃えていた史実に触れたことである[1)]。

⑵〈市民教育論〉と『トレテ』

フランスでは 1720 年代以降およそ１世紀の間に、政治体制が絶対王政から革命後の立憲王政と共和政を経てナポレオン帝政、復古王政へと変遷していった。本研究は、その間に見られた、「社会または国家の構成員に必要な教育をめぐる議論」を〈市民教育論〉と捉えて考察していく。以下では、ロランが 1726-28 年に公刊した『人文学を教え・学ぶ方法―知性と心につなげて―』*De la manière d'enseigner et étudier les belles lettres, Par raport à l'ésprit & au cœurs* を、人口に膾炙した通称『トレテ・デ・ゼチュード』*Traité des études* に基づき『トレテ』と呼ぶ。

⑶フランス教育史の研究動向

『トレテ』の内容もロランの教育思想も、日本ではこれまで本格的に研究されてこなかった。この理由は、古典主義時代のキリスト教信仰に篤い人文学者の主張が、フランス近代公教育の成立へつながる啓蒙思想家の教育論や革命期の公教育計画とも関連をもつとは考えられなかったからであろう。しかし近年、フランスではロラン教育思想の新解釈が提示され[2)]、日本でもフランス近代教育史の展開をカトリシズムの介在に注目して捉える重要性が指摘されている[3)]。

## ２．研究の目的

⑴シャルル・ロラン教育思想の全体的理解

ロラン教育思想に関する新解釈を、『トレテ』の内容を全体にわたって検討して試みる。同書は中等教育と高等教育前半段階の古典人文学を扱った書物として知られてきた。しかしテクストの検討から、ロランの目的は中・高等教育だけではなく、就学前の教育から女子への学校教育の普及も含めて国民全体の教育を論じることにあった点が明らかになろう。これにより、彼の教育思想の内容とその受容を、市民教育論の形成という観点から考察する妥当性を立証したい。

⑵フランス市民教育論の形成に関する考察

18 世紀中葉以降の思想家・教育家・作家らによる教育論の内容と展開を、『トレテ』の直接の受容やロランの主張に関連する議論に着目して〈市民教育論〉の形成を探る観点から検討する。具体的には、日本でも欧米でも従来よく研究されてきたルソー（1712-1778)、ディドロ（1713-1784)、エルヴェシウス（1715-1771)、コンドルセ（1743-1794）に加えて、新たにカンパン夫人（1752-1822）やギゾー夫人（1773-1827）といった女性の著者による教育論も検討していく。

⑶フランス近代教育史の展開に関する再考

日本の教育史の通説によれば、フランス近代公教育の成立は、18 世紀後半の啓蒙思想家による教育論を源泉として革命期にコンドルセが提示した理念が、ナポレオン帝政以降の学校教育をめぐる国家と教会のヘゲモニー抗争を経て、第三共和政期に法制化されたと知られている[4)]。これに対して、本研究は、1720 年代から 1820 年までを対象に、政体の変遷や当事者間のイデオロギー対立とは異なる次元で進行していた〈市民教育論〉の形成を探り、フランス近代教育史の展開に関する通説的な理解の再考も試みる。

## ３．研究の方法

⑴シャルル・ロラン教育思想の全体的理解

『トレテ』の中でも、すべての人を対象とする〈市民教育〉の創出という観点から重要と考えられる三つのテーマ、すなわち、①言語教育におけるフランス語の重視、②女子への学校教育の普及、③歴史学習を通じた道徳教育に関する内容を検討する。ロランが同書を公刊した目的は、パリ大学のコレージュで行われている教育を広く世に知らせることにあった。ただし彼は、それら３点では教育に関する新提案を行っていると認識し、読者へ明確に表明していたのである。

⑵フランス市民教育論の形成に関する考察

ルソー、ディドロ、エルヴェシウス、コンドルセ、カンパン夫人、ギゾー夫人の教育に関する著作を、『トレテ』の受容やロランの主張に関連する議論に着目しながら①言語教育・②女子教育・③道徳教育の３観点から検討して、1820 年代へかけての〈市民教育論〉の形成を考察する。

## ４．研究成果

⑴シャルル・ロランの教育思想

シャルル・ロランはパリの刃物職人の子だったが、幼い頃に修道士から知的才能を認められ、奨学金と有力者からの支援も受けて学問の道へ進んだ。20 代で王立コレージュの雄弁術教授に就き、パリ大学学長に 1694 年と 1720 年との２度選出された彼は、当時を代表する古典人文学者であったと言えよう。信仰心に篤くジャンセニスム jansénisme を奉じたロランは、カトリック教会と王権がそれを弾圧したために教壇を追われた後、主著となる教育論『トレテ』をはじめ、『古代史』*Histoire ancienne* と『ローマ史』*Histoire romaine* を晩年に次々に公刊した [5)]。

ロランの『トレテ』は、パリ大学のコレージュの課程に即して言語・詩学・修辞学・哲学を扱うのに加えて、当時はまだ学問として確立されていなかった「歴史」を取り上げ、一番多く紙幅を割いた。歴史編の内容は、キリスト教の理解を深める「聖史」よりも、世俗の古代史が圧倒的に多くを占めた。ギリシア・ローマの古典から歴史を学ぶ目的は、理屈よりも説得的な実例を通じて道徳性を涵養することだった。これが彼の教育思想の自らも認めていた特徴であり、『トレテ』が 19 世紀に幾度も版を重ねて教育に携わる者たちに参照され続けた理由だと思われる。

なお、ロランはフェヌロンの教育論を高く評価していた。フェヌロンは『女子教育論』(1687) を著し、ルイ 14 世の孫ブルゴーニュ公ルイの教育係に任じられると〈王子教育〉のために、ホメロス『オデュッセウス』に想を得て『テレマックの冒険』(1699) を創作した。この作品は 18 世紀に国内で広く読まれ、19 世紀前半にはヨーロッパ各国で青少年向け書物のベスト・セラーとなった [6)]。その中には、子どもの教育について、「公共の学校を設立し、神々への畏敬、祖国愛、法の尊重、歓楽や生命よりも名誉を選び取ることを教える」ように語られる場面もある [7)]。〈市民教育論〉の形成は、フランス文学作品のそうした側面からも考察される必要があろう。

⑵言語教育

ロランについて、これまで日本の教育史事典では、おそらくフランスか欧米の文献に基づいて、「ポールロワイヤル派の教育理論を支持してラテン語よりもフランス語を重視、教授法に近代的観念を導入するなど先駆的な改革を行った」と説明されている [8)]。しかし『トレテ』の内容を検討すれば、ロランは「慣用」usage が言語の最高支配者であり、その前では理性すら権利を失うと論じている。これは言語に関して理性による普遍的な論理の探究を重視するポール・ロワイヤル派の立場とは正反対の主張である。ロランの教育思想は、「ポール・ロワイヤル派」や「ジャンセニスト」や「パリ大学」といった特定の主義主張や所属団体によってレッテルを貼らずに、あくまでもテクストから考察しなければならない。

ロランは言語能力の意義を、ギリシア語やラテン語を通じて古代の賢者と対話できるようになり、「すべての時代の同時代人」にして「すべての王国の市民」と呼べる普遍的な知性を備えられる効用に認めた。ただし彼は、コレージュで教育すべき言語にギリシア語・ラテン語・フランス語の三つを挙げながら、教育はフランス語から開始されなければならないと論じた。母語の教育を優先した主張は、18 世紀後半に啓蒙思想家がコレージュでの不毛なラテン語教育へ向けた批判を先取しており、1760 年代以降の「国民教育」l'éducation nationale を求める議論へ受け継がれたと解釈できる。そうした議論の展開の中で〈市民教育論〉の形成を捉えていくには、女子の学校教育がどのように考慮されていたかについても検討する作業が不可欠である。

⑶女子教育

19 世紀の女子教育を論じたフランソワーズ・マユールよれば、17 世紀末にフェヌロンの『女子教育論』が女子教育は等閑に付されていると批判して優れた古典となったが、それは貴族の女子のみを対象としブルジョワと民衆の女子は全く考慮しておらず、両階層の女子教育へも社会的関心が向けられたのは 1830 年以降であると言う [9)]。『トレテ』における女子教育論も、良妻賢母の養成を目指した趣旨では、確かにフェヌロンに代表される議論の潮流に位置付けられる。

しかし、ロランはまた、フェヌロンと比べた自分の主張の新しさも明確に認識して述べていた。それはコレージュすなわち男子のみの学校で採られるべき理想的な指導方法を、女子が学ぶ初等レベルの〈小さな学校〉petite école や中等レベルの修道院寄宿学校の教師たちへも広めようとする新しさである。ここには 18 世紀前半段階における女子教育思想の新展開が認められる。さらに、ロランが「原理」として、「性それ自体は知性に何の違いももたらさない」と論じた点も注目される。これは次項の歴史・道徳教育の対象に女性も含む主張へつながると思われる。

⑷歴史教育を通じた道徳教育

ロランは歴史が「すべての人間のための道徳の学校となる」と唱え、歴史教育の必要性は「他者へ何らかの権威を行使するすべての人びと」にあると論じた。その中に家庭で子どもに対する母親と、家政や家業で使用人に対する女主人も含まれた点が、〈市民教育論〉の形成において注目される。道徳の核心は、誠実さとそれがもたらす名誉を最も重んじることとされた。

ルイ 14 世の第一王子の教育係を務めたボシュエ (1627-1704) は、ただ一人の生徒のために執筆し 1681 年に公刊した『世界史論』で、「情念と利害、時代と状況、善と悪がなしうることを発見させるには、歴史より優れた手段はない」と教えていた [10)]。宮廷における〈王子教育〉で試みられた歴史学習による道徳性の涵養を、約半世紀後にロランは『トレテ』を通じて、より広く貴族やブルジョワ層の子弟を教える学校と彼らの家庭教育へも普及させようとしたのである。

歴史教育の具体的内容では、ロランが古代史でペルシアのキュロス王とスパルタのリュクルゴスを取り上げ、賢明な君主や有徳な市民を育てた国家による公教育を示した点が注目される。この点に関して、18 世紀フランスの歴史書と教育論を渉猟したミシェル・ルガニューは、『トレテ』がスパルタの伝説的立法者リュクルゴスの伝説と 18 世紀中葉以降のフランス社会における教育問題への関心とを結び付けて、「公教育のスパルタ幻想」を産み出したと見なしている [11)]。ルソーが『エミール』（1762）で古代の市民の在り方を念頭に公教育を論じ、革命議会でのルペルティエによる公教育計画（1793）がスパルタをモデルにしたかのような内容であることは、従来よく知られてきた。そうした議論の背景に『トレテ』の存在が見逃せないと考えられる。

ただし、『トレテ』が公教育をめぐる「幻想」を産んだという解釈には注意を要する。と言うのもロランは、スパルタでは屈強な戦士に育つ見込みがない子どもが遺棄され、鞭打ちの体罰で息絶えた子どもがいた点にも言及し、そうした残忍で野蛮な行為を、親の感情、人間本性、キリスト教精神に照らして批判した。『トレテ』が読者へ伝えようとしたのは、古代スパルタの公教育の「幻想」ではなくて公共の取り組みを通じた道徳教育の重要性であり、これは当時のフランス社会で求められていた「現実の課題」であったと理解すべきだろう。

⑸フランス市民教育論の形成

フランス革命期にコンドルセは、奴隷制の上に成立した古代の共和国の公教育は自由と平等が原理の近代国家に適用できないと論じ、また、道徳教育を宗教思想と峻別する必要性を説いた。これは公教育の原理として、『トレテ』を過去のものとする主張である [12)]。それでも先述の通り、1818 年にロランによる「善き市民」のための「教育の学問」が公的に評価された史実は、王政復古下の反動的な現象と見るよりも、イデオロギー対立とは異なる次元で求められた公教育および道徳教育の実際的な基盤が、依然として『トレテ』に認められていた表われでなかろうか。

1820 年代には『ロラン全集』*Œuvres complètes de Rollin* が二つの出版社から刊行された。いずれも『トレテ』、『古代史』、『ローマ史』で構成されて 30 巻に及び、一つの校訂者は七月王政下で公教育大臣、外務大臣、首相を務める歴史家ギゾーFrançois Guizot（1787-1874）である。他方、『子どもからのロラン』*Le Rollin du jeune âge*（1824）と銘打った著作の抜粋も公刊されていた。歴史を通じて市民の在り方を示す書物に対する教育上の需要があったと推察される。

本研究は、フランスで 1720 年代に公刊されたシャルル・ロランの『トレテ・デ・ゼチュード』の内容を全体にわたって分析するとともに、ルソーなどを含む多様な論者による 1820 年代までの著作も検討して、その間の教育思想の展開を〈市民教育論〉の形成を捉える観点から考察した。結論として、革命以降の政体や政教関係の変化に拘わらず、〈市民の創出へ向けて、キリスト教を否定せずに根底に置き、フランス語による基礎教育と古典人文学に基づく道徳教育を行う学校を追求し、女子への普及も視野に入れる思潮〉が徐々に醸成されていたと解釈できる。これが七月王政期以降の公教育の進展とそれをめぐる意見対立の前提になったかと筆者は考える。

＜引用文献＞


1) Saint-Albin Berville, *Éloge de Rollin*, Discours qui remporté le prix d'éloquence décerné par l'Academie Française, Dans sa séance du 27 aout 1818, Paris chez Firmin Didot, 1818.
2) Josiane Guitard-Morel, *La Relation éducative au siècle des Lumières*, Paris, Harmatten, 2015.
3) 前田更子「公教育とカトリシズム―近現代フランス史研究の可能性」（世界史の研究 247 研究フォーラム「近代における教育」）『歴史と地理』694、山川出版社、2016、58-61 頁。
4) 松島鈞『フランス近代公教育の成立過程』亜紀書房、1968、268 頁。
5) ロランの生涯と著作に関しては次の文献を参照。Henri Ferté, *Rollin, sa vie, ses œuvres et l'Université de son temps*, Paris, Hachette, 1902.『古代史』（1730-38）は全 13 巻。『ローマ史』16 巻（1738-48）は、ロランが 7 巻まで著し、8 巻以降を弟子のクルヴィエが書き継いだ。
6) Isabelle Nières-Chevrel et Jean Perrot(sous la direction de), *Dictionnaire du livre de jeunesse, La littérature d'enfance et de jeunesse en France*, Paris, Édition du Cercle da la Librairie, 2013, p.356.
7) Fénelon, L'Aventures de Télémaque, *Œuvres II*, édition présentée,établie et annotée par Jacques le Brun, Bibliothèque de la Pléiade, Paris Gallimard, 1997, pp167-168.
8) 梅根悟監修『世界教育史事典（世界教育史大系 40）』講談社、1978、419 頁。
9) Françoise Mayeur, *L'éducation des filles en France au XIXe siècle*, Paris, Hachette, 1979,p.7.
10) Marie-Paule Craire-Jabinet, *L'histoire en France du Moyen Âge à nos jours, Introduction à l'historiographie*, Paris , Flammarion, 2002, pp.95-96.
11) Michel Legagneux, Rollin et le "Mirage Spartiate" de l'éducation publique, dans *Recherches nouvelles sur quelques écrivain des Lumières,* sous la direction de Jacques Proust, Genève, 1972, pp.111-162.
12) Condorcet, Nature et objet de l'instruction publiue, 1791, dans:*Cinq mémoires sur l'instruction publique*, Paris, GF-Flammarion, 1994, pp.82-83.コンドルセ（松島鈞訳）『公気教育の原理』明治図書（世界教育学選集 23）、1961、31-32 頁。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>越水雄二 | ４．巻<br>26 |
| ２．論文標題<br>シャルル・ロラン著『トレテ・デ・ゼチュード』の受容からみるフランス近代公教育の形成過程―革命期から復古王政期まで― | ５．発行年<br>2017年 |
| ３．雑誌名<br>教育文化 | ６．最初と最後の頁<br>18-38 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>越水雄二 | ４．巻<br>60 |
| ２．論文標題<br>「教育史研究の新たな船出」へ向けて | ５．発行年<br>2017年 |
| ３．雑誌名<br>日本の教育史学 | ６．最初と最後の頁<br>118-120 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>越水雄二 | ４．巻<br>28 |
| ２．論文標題<br>『テレマックの冒険』にみるフェヌロンの教育思想 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>教育文化 | ６．最初と最後の頁<br>326-347 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>越水雄二 | ４．巻<br>29 |
| ２．論文標題<br>フランス18世紀前半における女子教育思想の展開 | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>教育文化 | ６．最初と最後の頁<br>1-24 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>越水雄二 | 4．巻<br>30 |
| 2．論文標題<br>18世紀フランスにおけるシャルル・ロランの歴史教育論 | 5．発行年<br>2021年 |
| 3．雑誌名<br>教育文化 | 6．最初と最後の頁<br>270-291 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| 1．発表者名<br>越水雄二 |
| 2．発表標題<br>国際シンポジウム「教育史研究の新たな船出―教育史研究はどこに向かうべきか―」における指定討論 |
| 3．学会等名<br>教育史学会第60回大会 |
| 4．発表年<br>2016年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>越水雄二 |
| 2．発表標題<br>シャルル・ロランのリベラリスム―フランス18世紀教育史の一断面― |
| 3．学会等名<br>教育史学会第61回大会 |
| 4．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>越水雄二 |
| 2．発表標題<br>シャルル・ロランにみるフェヌロン教育思想の受容 |
| 3．学会等名<br>教育史学会第62回大会 |
| 4．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>越水雄二 |
| ２．発表標題<br>フランス18世紀における公教育論の背景と展開 |
| ３．学会等名<br>教育史学会第63回大会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>越水雄二 |
| ２．発表標題<br>シャルル・ロランとルソー―18世紀フランスにおける教育思想の展開をめぐって― |
| ３．学会等名<br>教育史学会第64回大会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

〔図書〕　計1件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>越水雄二、大室剛志、Hiroko Saito、阿部幸一、一瀬陽子、團迫雅彦、木戸康人、Yusaku Oteki、加藤正治、Noriko Suzuki、太田聡、小野浩司、高橋勝忠、Eiji Yamada（西岡宣明、福田稔、松瀬憲司、長谷信夫、緒方隆文、橋本美喜男編） | ４．発行年<br>2018年 |
| ２．出版社<br>開拓社 | ５．総ページ数<br>428（38-49） |
| ３．書名<br>ことばを編む | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|